はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
Vol. 03
発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市大字双柳1-1　Tel (042)973-2111
第3号　平成20年3月31日発行　　平成18年3月31日創刊

飯能の建造物と植物を学ぼう

●第3号の特集は「飯能の建造物と植物」

第1、2号は植物の特集でしたが、今回は「建造物（長光寺本堂）と植物」を取りあげました。建造物は難しい面もありますが、日本の歴史をたどることのできる代表的な文化財です。これを機会に、有名な建造物をじっくり見てみましょう。

植物はシリーズの第3回目です。様々なみかたで植物を観察してみましょう。

特集「飯能の建造物と植物」…1

長光寺本堂

飯能市教育委員会生涯学習課
曽根原 裕明

1 **はじめに** 長光寺は飯能市大字下直竹にある曹洞宗寺院です。長光寺には多くの文化財があります。国指定重要文化財「雲版」、県指定文化財「長光寺本堂」、「長光寺の惣門」、市指定文化財「長光寺三門」があります。雲版は正和2年(1313)銘が記されており、鎌倉時代末期のものと考えられます。

2 **長光寺の歴史** 長光寺は貞治5年（1366）、僧通海良義により開創されたと伝えられています。通海は、曹洞宗太祖瑩山の弟子峨山の弟子により開創された奥州の正法寺（岩手県奥州市）2世月泉の弟子です。そのためか、長光寺は関東地方において、曹洞宗では最も古く開かれた寺院の一つです。また秩父の広見寺は明徳2年（1391）に長光寺2世天光良山が開創しています。長光寺は正法寺の末寺でしたが、江戸時代に飯能市の能仁寺の末寺となりました。

重要文化財「雲版」は曹洞宗が広がる過程で長光寺にもたらされたものと考えられます。

伽藍再興　長光寺は江戸時代の初めに伽藍が再興されました。境内の銅鐘の銘文には、岡部六弥太の子孫、岡部小右衛門忠正が妻と共に堂宇の朽敗を嘆き、寛永15年（1638）に伽藍を再建したことが記されています。

長光寺本堂、長光寺の惣門、長光寺三門は同時に再建されたと考えらます。長光寺本堂は曹洞宗本堂の国内に残された最も古い形態をもった江戸時代初期の建物です。

3 **仏堂と伽藍** 長光寺本堂は平成11年度に半解体修理工事が完成し、再建当時の姿がよみがえりました。これから仏堂と伽藍（寺院境内の建物の配置）の簡単な歴史についてみていきましょう。

仏堂はお寺の本尊や宗派の開祖、お寺の開山（お寺を開いた僧）などの仏像を祀った建物です。伽藍は、古くは法隆寺に見られるように塔と金堂（仏堂）が回廊の内側にあり、講堂が回廊の外側にありました。回廊の内側は仏の聖域でしたが、徐々に講堂が回廊の内側に取込まれ、人が聖域に入り込むようになっていきました。仏像を祀る建物に、人が仏を礼拝するための建物が並んで作られるようになり、さらにそれが一つの建物でできるように工夫されていきました。中世の密教仏堂（天台宗・真言宗）には5間四面の建物の前側に外陣、後側に内陣があります。これにより外陣から、多くの人が参拝できるようになりました。

禅宗では修行が重んじられ、僧堂で坐禅を行い、法堂（曹洞宗）や方丈（臨済宗）では住持（住職）による修行僧

への説法や儀式が行われました。また仏殿には本尊が祀られていましたが、徐々に法堂や方丈に本尊が祀られるようになり本堂と呼ばれるようになりました。

禅宗の伽藍として有名な七堂伽藍は山門、仏殿、法堂、僧堂、庫裡、東司（便所）、浴室が回廊で結ばれ、中央に仏殿があります。伽藍は山門、仏殿、法堂が直線上に並ぶのが特徴です。

4 **長光寺本堂** 長光寺本堂は桁行11間、梁間7.5間で、寄棟造りの茅葺型銅板葺の屋根です。修理前の屋根は茅葺でした。今回の修理工事において広縁前の土間が復原されました。長光寺の間取りは土間、広縁があり、部屋は前後2列、横4列で8室になっています。

曹洞宗本堂の間取りは臨済宗の方丈に近いものです。方丈は本来住持（住職）が住んだところです。臨済宗の方丈（本堂）は広縁と2列6室で、中央前列に室中、後列に仏間があり、室中は板敷きで周囲に畳を敷いており、儀式がおこなわれます。曹洞宗間取りは土間、広縁、2列8室が主になっています。これは方丈の2列6室に対して向かって右に2室が加わったものと考えられます。そのため、曹洞宗本堂は向かって左2列目に主となる部屋があり、前列の大間（臨済宗の室中）は畳敷きで儀式が行われます。

長光寺本堂の大間奥の内陣（臨済宗の仏間）には来迎柱、須弥壇がありますが、当初は存在せず、通し仏壇に両祖像、開山像等が祀られていたと考えられます。須弥壇は本尊を祀るための壇で、後ろ側に来迎柱が2本あります。

曹洞宗初期の本堂は回廊が広縁前の土間で結ばれています。広縁、2列8室と土間の存在が初期の曹洞宗本堂の特徴です。

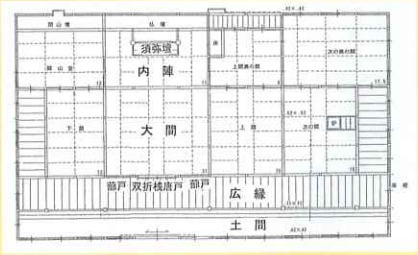
長光寺は惣門、三門（山門）、本堂が直線上に並んでいます。惣門（総門）は山門の前に設けられる小さな門です。長光寺の寛政2年（1790）の絵図には鐘楼門、衆寮、庫裡、本堂が描かれ、本堂の前には、「仏殿大破跡」と記されており、仏殿が存在したことが窺われます。衆寮は、この時代の修行僧の存在を推定でき、衆寮が僧堂としての役割を果たし、坐禅修行、睡眠、食事等が行われ、反対側の庫裡で食事の準備が行われたと考えられます。雲版は主に食事等の合図に鳴らされますが、庫裡に吊るされ鳴らされたものと考えられます。

長光寺では伊勢湾台風（昭和34年）のときに中雀門、回廊が壊れています。長光寺にはもともと七堂伽藍に近い形があったものと考えられます。今回の復原工事によって七堂伽藍に近い形であった長光寺本堂がよみがえることになったと言えるでしょう。

修理工事 本堂工事では土間復原、屋根工事の他に、軸部、軒、小屋組、建具等の修理を行いました。正面、側面の建具は、鴨居、敷居に3本溝（江戸時代前半に見られる）があったため板戸2枚と、明り障子1枚に変更しました。大間入口中央には双折桟唐戸を整備し取付けました。双折桟唐戸は二つに折れる両開き板戸で、表面が桟で縦横に仕切られており、上部には岡部家の家紋「跳十字」があります。双折桟唐戸の両脇間は蔀戸の金具の痕跡が残されていたため、蔀戸を復原しました。蔀戸は格子状の戸で、上下に別れ、上の蔀戸は90度、外開きになり金具に吊るし、下の蔀戸は取り外しができるようになっています。双折桟唐戸と蔀戸の存在は初期の曹洞宗本堂の大きな特徴です。

長光寺本堂

土間・広縁・双折桟唐戸



長光寺本堂平面図

飯能市は植物の宝庫(Ⅲ) ―様々な植物―

文化財保護審議委員会委員
手塚　映男

1 はじめに

「お宝スポット」では、これまで飯能市の極相林など自然林を取りあげてきましたが、今回は飯能市に生育する特徴的な植物の幾つかを紹介したいと思います。

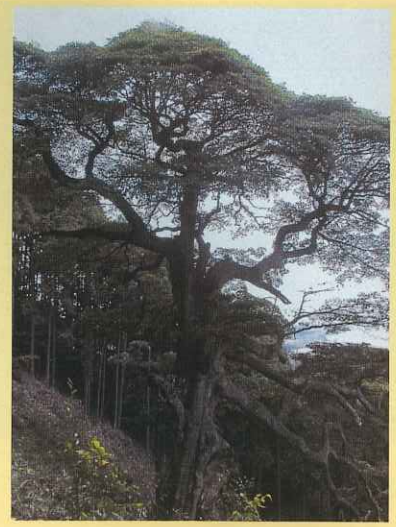
2 飯能市の巨木類

タブノキ　上直竹の富士浅間神社の裏山で、目通りの幹周りが約5.5m、木の高さは20m以上に達する巨木が見られます。クスノキ科の常緑の高木で、初めて見たときは、あまりの大きさに驚きました。幹の下の方から枝があり、斜面でも太陽の光を受けられるようになっています。黄緑色の花をつけ黒紫色の実を結びます。日本の暖温帯の極相林に多く、東北地方では海岸に限られますが、関東地方では平野部につながる山麓地帯まで見られますが、平野部では少なくなっているようです。

ウラジロガシ　「お宝スポット」の1号でも紹介しましたが、南川に目通りの幹周りが3m前後もある巨木が森をつくっていて、埼玉県の天然記念物に指定されています。ブナ科の植物で、葉は細長くて先端近くに鋸歯があり、葉先も尖っています。葉の裏が白くなるのが特色です。暖温帯でも温度の低い地方に多いようです。

カシのなかまは、飯能市には、このほか**アカガシ、ツクバネガシ、アラカシ、シラカシ**などが生育していますが、アカガシは生育地が限られているようです。

巨木類はこのほかにも、子の権現の二本杉など(「お宝スポット」2号写真参照)がありますが、それぞれの場所の歴史などを伺うことができ大切に保存したいものです。



タブノキ

3 「ハンノウ」という名まえのついた植物

ハンノウザサ　植物学者として有名な牧野富太郎博士が発見し、1926年に「ハンノウザサ」という和名をつけ新種として発表した植物です。しかし、後にアズマザサと同じ種類であるとされましたが、飯能市で発見され名前がつけられたことで「見返坂の飯能ササ」として埼玉県の天然記念物になっています。稈(カン)(イネ科の植物の茎をいう)は高さ1m前後になり、濃い紫色をおびやすく、また、枝先につく長さ15cmほどの葉の裏には細毛が多く、なでると柔らかな毛の多い布にさわっている感じをするのが特徴です。日当たりを好む植物ですが、周辺の木が高くなって暗くなり、現在では道ばたに残るだけとなったので、市でも保護に努めています。

ハンノウツツジ　高さは1mほどで、葉はサツキより幅が広く大きめですが光沢があり、花はサツキに似ています。東京大学教授や国立科学博物館長をされた中井猛之進博士が、1915年に植物学雑誌に新種として発表しました。その後ヤマツツジとサツキの雑種とされていますが、現在でも**ハンノウツツジ**という名前で掲載している植物図鑑もあります。天覧山で観察するのは難しいですが、市内の所々に植えられています。

なお中井猛之進博士は、天覧山はツツジが多く、東京付近ではこれ以上の所は少ないだろうとも書いています。最近でも**ヤマツツジ、バイカツツジ、ミツバツツジ、アブラツツジ**などの生育が確かめられています。

ハンノウザサ

4 絶滅が心配される植物

カタクリ　岩渕に飯能市が天然記念物に指定している**カタクリ・イカリソウ群落**があります。**カタクリ**の花も見事ですが、少し遅れて咲き始める**イカリソウ**も花の形が変わっていて興味を誘います。カタクリは、このあたりの山麓地域では北向き斜面の山裾で多く生えているようですが、市内には、埼玉県の絶滅危惧種で、細長い葉の中軸に白い筋があって、長く伸びた花茎の先に白い花を一つつけるカタクリと**ヒロハノアマナ**(ユリ科)がいっしょに生えているところもあります。今でも見られるのは地元の方々のご努力のお陰と思います。

春から夏にかけて美しい花をつけるユリ科やラン科の植物には、埼玉県の絶滅危惧種となっている種類が多いですが、そのうち、ヒロハノアマナのほかにも**アズマシライトソウ、コオニユリ、エンレイソウ**(以上ユリ科)、**エビネ、キンラン、サイハイラン、クマガイソウ、カキラン、カヤラン、クモラン**(以上ラン科)などが飯能市で生育していることが確かめられています。なお、絶滅が心配される種類はこのほかにもたくさんあります。

イカリソウ

カタクリとヒロハノアマナ

5 豊富なシダ植物

ウラジロ　正月のお飾りにも使う植物で知っている方も多いと思います。シダ植物で葉は高さ1m以上にもなり、羽片は二股状に出て裏面が白くなっています。埼玉県では飯能市をはじめ寄居町にかけての山麓地域の所々に生育しています。これはほんの一例で、飯能市では天覧山をはじめ多くの所でたくさんのシダ植物を観察できます。春から秋にかけてシダ植物に出会ったら、葉の形や葉をそーっと裏返して観察してみましょう。葉の裏に胞子嚢(ノウ)をつけてふえる種類が多く、そのつき方は種類によって違うので、できれば虫眼鏡を使ってみると自然の秘密をまた一つ知ることができるでしょう。

6 終わりに

飯能市でこれまでに生育が確かめられている植物は、種子植物が約1130種、シダ植物が約135種ありますが、調査が進めばもっと多くなると思います。特徴のある植物もまだまだたくさんありますが、次の機会にしたいと思います。皆さんもぜひこれまでに注意をしなかった植物の観察に挑戦してみてください。環境問題で重要な課題となっている緑の保全ということから考えても、この多様性に富んだ飯能の自然は、ぜひ守っていかなければならないと思います。

ウラジロ